幼児の道徳意識についての実験的研究

和歌山信愛女子短期大学
谷口　緑
細井葉子

Ⅰ目　的

幼児の道徳意識の究明と、ジャン・ピァジェの幼児の世界観を研究する方法についての批判。

Ⅱ対　象

和歌山市私立ナザレ幼稚園々児二十名で年令五才、六才の者。他に予備調査として同年令児若干名。

Ⅲ方　法

予備調査二回によって本実験の方法を定め、本実験を四回に分けておこなった。その内容は、集団遊び『猫と鼠』の実際を観察したこと、個人的質問をおこなったこと、『坊主めくり』を共に遊んだこと。

Ⅳ実験に使用した質問

予備調査によってあらかじめ用意したもの十二問と追加質問三問。その内容の要点は、遊びの規則（ジャンケン集団遊び）、幼稚園生活での規則（あいさつ、約束、登退園時刻など）、規則違犯に対する判断と処置、自然法則的な規則（就寝、起床など）に従う理由、日の出や日没などの自然現象についての意識と規則発生に関する判断をみるための質問である。

追加質問は先の十二の質問の解答によりみられた規則の神聖視を更に究明し、補足をおこなうためのものである。

Ⅴ実験の結果

第一部は二十名の幼児に与えた十二の質問の解答の分析で、一、二の例外はあるが幼児の道徳が他律的であることが明確となったように思われた。

第二部は、第一部によって規則の神聖視がみられ、『神様』のことばが多く使われたので九名に対する追加質問三問によって『他律』の『他』と『神様』との関係について究明しようとしたがじゅうぶんな資料が得られなかった。

第三部は十名の幼児と実験者との遊びで実際の場面から規則に対する意識を見ておこなった。

Ⅵ結果に対する考察

二、三の例外はあったが幼児の道徳意識は、まずピァジェの云う他律の道徳に属することがわかった。この『他』について更に追求を試みたがその意図はじゅうぶん果せなかった。しかし『他』が『神』である場合はあまり多くないと思われた。

また、幼児の世界観を知る方法として、『よく吟味された質問』による個人的質問法は、一つのよい方法であると思われた。しかしその『よく吟味された質問』については今後の研究が必要であり、また被験児の数は二十名では不足である。それは、幼児が質問に応じてくれない場合や、質問を続けられないなどの思わぬ困難を生じるからである。